

Nie wieder! 二度と再び!

梶村道子(ベルリン・女の会)

ロシアのウクライナ侵略から1年。連日報じられるウクライナの惨状と破壊された街の様子は第二次世界大戦を、凍土の塹壕戦は第一次世界大戦を思い起こさせます。ウクライナからの難民は後を絶たず、この1年にベルリン市で登録された人は7万人。実数は10万人といます。ドイツのウクライナへの武器供与はこの間に加速しました。

ナチズムの犯罪を省み、犠牲者を追悼する催しで語られてきた「Nie wieder!」(二度と再び!)という言葉が、武器供与と戦争の終結を巡って対立する2つの意見となってドイツの世論を分けています。「Nie wieder!」は、ブーヘンヴァルト強制収容所の解放直後に囚人たちが亡くなった仲間を悼んだ誓いで、「想起する文化」の重要な要素です。「ノーモア・ファシズム」の意味が込められたこの言葉から、侵略戦争を指弾する「ノーモア・ウォー」が導かれました。「ノーモア・ファシズム」から派生した「ノーモア・アウシュヴィッツ」はいま、ウクライナの市民を見殺しにするなど、政府に武器援助を求める側のモラル上の支えとなり、「ノーモア・ウォー」は、武器供与より即時停戦をと主張する側のフレーズです。

そんな中、今年も1月27日にドイツ連邦議会でナチズム犠牲者追悼式典が開かれ、あらゆる犠牲者—欧州のユダヤ人、ドイツ占領下の中・東欧の犠牲者、シンティ・ロマ、「安楽死」の犠牲者、政治・宗教的信条ゆえに、あるいは性的少数者として、また「反社会的」と蔑まれて迫害された人々、戦争捕虜、強制労働者、抵抗運動に身を投じ迫害され処刑された人々—が想起されました。しかし過去にこの式典に招待されたのは、ホロコーストの犠牲者以外では、シンティ・ロマ、スターリングラード包囲の被害者、強制労働者、「安楽死」の犠牲者のみです。連邦議会で大統領と三権の長を前に語ることは被害者にとって尊厳の回復の最後のステップです。ドイツにおけるナチズム犠牲者の復権はまだ途上なのです。

今年の主題は長く顧みられなかった性的少数者です。クィア団体やホロコーストのサバイバーらが2018年に提出した請願を、当時の保守派の連邦議会議長が拒否するという曲折の末に、初めて実現しました。請願書の賛同者、ロゼッタ・カツさんは、長年ユダヤ人である

ことを伏せて生きてきた自身の体験から、戦後も隠れて生きねばならなかった性的少数者に想いを重ねます。カツさんは、クィアの人たちへの暴力が止まないのは、特定集団を「価値が低い」とするナチ・イデオロギーが根絶されていないからだと警告し、性的少数者への迫害がナチ時代のみでなく戦後も続いた事実についても、この日、語られたことに感謝して話を終えました。

ナチスは男性の同性愛を禁じた刑法175条を強化し、15,000人を強制収容所に拘禁しました。被害者はみなすでに亡く、犠牲者のカール・ゴラートさんとマリー・ブニャーさんの経歴は代読です。女性であるため刑法175条が適用されなかったマリーさんは「反社会分子」として拘束され、レズビアンだとの診断書に基づいて精神障害者施設に送られ、ガス殺されました。最後の登壇者クラウス・シルデヴァーンさんは戦後生まれで、ナチズムの被害者ではありません。しかし戦後も有効だった刑法175条により1964年に有罪判決を受けました。同法が廃止されたのは1994年、有罪判決が無効になったのは2017年です。

「Nie wieder!」の誓いの埒外に置かれた犠牲者集団があったとカツさんは言います。だからこそ「過去に迫害された人は敬意を込めて想起されるに値する。いま迫害に遭っている人は、その事実を認められ保護を受ける権利がある」と。いま欧州の現実には過去の記憶を残酷に上書きしつつあり、先は見通せません。そんな時期にもなお「想起する文化」に役割を求めるなら、それはカツさんのように、いま現在なすべきことを明示することでしょう。来賓席にはアフガニスタンとウガンダから逃れてドイツの庇護下にある性的少数者の姿があり、彼らと並んで、ホロコーストを生き延び、ロシアの侵攻後にドイツに避難先を求めたウクライナのユダヤ系市民が招待されていました。子供時代の記憶に新たな侵略と逃避の体験を重ねなければならないこの人たちに「Nie wieder!」が叶わなかったのはなんとも酷なことです。



カツさんは生後8ヶ月でオランダ人夫婦に預けられてナチ時代を生き延び、6歳のときに養父から事実を知らされた。自分がユダヤ人であることを公にしたのは50歳を超えてからだった。
© Deutscher Bundestag / Leon Kügeler / photothek